

東北紀行

Tohoku Travelogue

第 17 号 / 2017 年 2 月 / 編集: 山口泰史 (東北公益文科大学)

2016 年 12 月 18 日 (日) に、山形県酒田市の東北公益文科大学公益ホールにおいて、東北支部大会 2016 が開催されました。大会には学生を中心とする 19 名が参加し、開催校を代表して、公益学部観光・まちづくりコース長の温井亨教授よりご挨拶、および、丸岡泰東北支部長からのご挨拶ののち、12 件の研究発表と質疑応答が行われ、活発な議論が交わされました。また、研究発表会終了後は、ホテルリッチ&ガーデン酒田にて懇親会が開催されました。開催にあたり、ご協力いただいた関係各位に心より御礼申し上げます。以下に、各研究発表の要旨を掲載します。いずれも東北地方をフィールドとした研究ですが、どのテーマも全国の他地域に応用しうる内容ですので、東北支部のみならず、全国の会員の皆さまにもご一読をいただければ幸甚に存じます。

1. 岩手県釜石市佐須集落における観光資源の発掘

大木真菜・山本清龍 (岩手大学農学部)

釜石市の尾崎半島は歴史的に信仰の地としてだけでなく、自然歩道の活用等により観光地としても機能してきた。しかし、半島集落の人口減少、少子高齢化、2011 年の東日本大震災からの復興が課題となっており、地域の活性化が求められている。そこで本研究では、佐須集落で地域の観光資源の発掘を行うこと、発掘した資源の整理から、ガイドツアープログラムの内容の検討を行うこと、の 2 点を目的として、集落住民への聞き取り調査、トレッキングコースの検討を意図した現地調査を実施した。結果から、半島の地域資源マップを作成し、住民の思い出を継承し、集落間の関係性を含めた昔の生活を巡るツアープログラムの企画が可能と考えられた。

2. 石巻市の復興計画にみる音風景の保全の可能性

佐々木薫子・山本清龍 (岩手大学農学部)

JITR (Japan Institute of Tourism Research) - Tohoku

東日本大震災後の復興においては、自然環境の保全に加えて“音風景”の保全が重要課題の一つである。本研究では石巻市の復興計画を事例として取り上げ、音風景の 5 つのカテゴリーに関連すると考えられる記述を抽出し、その保全の可能性を検討すること、とくに「残したい日本の音風景 100 選」に選定された宮城県石巻市北上町北上川河口に分布するヨシ原の保全の可能性を考察すること、の 2 点を目的とした。結果から、復興計画では住民の生活基盤の復旧に重点が置かれ、音環境の保全可能性を検討できる事例の空間分布に偏りがあるものの、水辺環境と生活環境の空間関係の維持によって音環境の保全の可能性があると明らかになった。

3. 地域の良さを伝える人材の必要性～JR 東日本「駅からハイキング」を事例に～

山崎侑斗・中原浩子 (東北公益文科大学公益学部)

わが国の観光ボランティアガイド数は年々増加している。その中でも大学生による観光ガイドの取り組みは高く評価されており、若者の人材も育てているが、ガイド活動の多くは無償で行われることが多く、職業として成立していない。そのため、学生は卒業後、関連のない職業選択をする事が多い。そこで、鎌倉で人気を博している Huber の「TOMODACHI GUIDE」を取り上げ、さらに「旅のコンシェルジュ」機能を付加したガイド形態を創出すれば、ガイドが職業として成り立つのではないかと考えた。今回の研究は一事例にすぎないため、今後は職業として付加価値を高めるための事例研究を海外にも広げ、実際に検証を加えていきたい。

4. 福島県における DC 期間中の観光入り込み客に関する統計的分析

初澤敏生 (福島大学人間発達文化学類)

本研究ではふくしま DC 期間中の福島県の観光入込客の動向について統計から検討した。入込客数は会津地方を中心に増加が認められるが、主要都市の周辺部では動きが鈍い。また、道の駅とイベントの入込客増加が大きく、それ以外の入込客数は 2013 年を下回る。県北部を事例に見ると、大きく伸びている地点は地元客や比較的狭い集客圏の施設であり、地域住民の観光行動が活発化した結果入込客数が増加した可能性がある。ただし、宿泊統計では期間中に延べ宿泊者数で 20 数万人の増加がみられた。5 月を例に実宿泊者数を検討したところ、旅館と

リゾートホテルへの宿泊者が増加しており、DCが経済の活性化に一定の効果があつたことが認められた。

5. Web 調査を通した岩手県の酒蔵の情報発信に関する研究

村田青葉・山本清龍（岩手大学農学部）

岩手県における酒蔵ツーリズムの展開にむけては、酒蔵を中心とする地域からの情報発信が必要である。そこで、岩手県の酒蔵18軒、先進事例と位置づけられる、佐賀県鹿島市の酒蔵5軒、福島県喜多方市の酒蔵7軒、秋田県秋田市の酒蔵4軒、酒造組合と酒蔵ツーリズムのホームページの分析を通し、情報発信の現状把握、岩手県内の酒蔵の観光資源としての活用可能性の検討を研究目的とした。その結果、岩手県の酒蔵は販売窓口としてホームページを積極的に活用していた。しかし、観光振興にむけては、地域情報をまとめるサイトの必要性が示唆された。一方、同県では個々の酒蔵同士が連携するなど先進事例とは異なる情報発信の取り組みを確認できた。

6. 日本人学生の宗教観と外国人旅行者の受入に対する意識の研究

デリシャト＝アブデラハマン（岩手大学大学院農学研究科）・山本清龍（岩手大学農学部）

近年、訪日外国人旅行者数の増加に伴い、ムスリム旅行者も増加しているが、テロ等の社会情勢を背景にイスラム教への警戒感があり、独特の食習慣への対応が求められるなど課題は多い。そこで本研究では、日本人学生の宗教観、観光意識の把握から、イスラム教、ムスリムへの偏見の払拭、インバウンド観光の促進に向けた検討をすること、ムスリム旅行者の旅行環境の整備の方向性を提案、考察すること、の2点を目的とした。その結果、他宗教に比べてイスラム教に対する親しみの度合いは低く、宗教に起因する危険性が認識されていた。しかし、外国人旅行者の受容に対する肯定的意識も見られ、外国人に対する正しい理解が必要と考えられた。

7. デジタルデトックスにむけた農村空間の利用可能性に関する研究

久保暁子（岩手大学大学院農学研究科）
・山本清龍（岩手大学農学部）

近年、デジタル機器の利用者が増加する一方で、それに起因する健康被害が指摘されており、デジタル機器か

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohokuから物理的、心理的に距離をおく時間、空間が求められている。そこで本研究では、農村空間に注目し、デジタルデトックスにむけた方法論を整理すること、農村における空間利用の可能性を検討し、示唆を得ること、の2点を目的とした。結果から、デジタルデトックスにはデジタル機器の使用以外で何か夢中になれるものがあること、自然志向との組み合わせによる農村空間の活用が有効であり、デジタルデトックスプログラムの可能性が示唆された。さらに、インターネット圏外などデジタル機器を使用できない特殊な環境にも価値があると考えられた。

8. 一戸町の観光資源の把握と観光振興に関する研究

佐藤太陽・山本清龍（岩手大学農学部）

一戸町は奥中山高原、御所野遺跡など豊かな自然環境と歴史、文化資源を持つ。しかし、その資源分布をみると、町の北端と南端に観光資源が集中し、全体性をどのように構築できるか課題があると考えられた。そこで、町の3箇所の観光拠点における来訪者を対象とする郵送回収式意識調査を通し、一戸町全体の観光資源の現状を明らかにすること、一戸町の観光資源の包括的活用に向けた提案を行うこと、の2点を目的とした。その結果、自然風景、温泉、歴史・文化が町の魅力として捉えられていること、とくに町外からの来訪者では魅力の全体性が欠如していることを明らかにした。また、結果をふまえ、個々の資源を取り結ぶストーリーづくりを提案した。

9. 歴史的建造物の保存に関する一考察

山口泰史（東北公益文科大学公益学部）

2006年より、フィデア総合研究所（山形市）の機関誌『Future SIGHT』に、連載記事「歴史を語る建物たち」を寄稿している。これまで山形県26件、秋田県12件を紹介してきた。その経験から、歴史的建造物が保存される要素として「所有者の情熱」「地域の情熱」「専門家の助言」の3つが考えられるとの見解を示した。これらの1つ以上を備えることは必要条件であって十分条件ではないが、少なくとも1つの要素もない建物は、将来的に解体の末路をたどる可能性が極めて高い。一方で、建物自体の建築的価値だけでなく、建物が紡いだ歴史に価値がある場合もあり、

多面的に建物の価値を評価することや、建物の価値を「知る」機会の創出が重要であると提案した。

10. 東日本大震災被災地への教育旅行について ～石巻市・南三陸町を例に～

末永大夢（石巻専修大学経営学部）

東日本大震災の被災地への観光誘致政策のうち経済効果が大きい教育旅行誘致の方針について調査をした。宮城県の石巻市と南三陸町では教育旅行誘致の方針が異なっている。石巻市は「防災リーダーの育成」を考え、語り部や防災セミナーなど被災地ならではのツアープログラムに力を入れており、南三陸町では「地域の資源を活かし生きる力を育む」など南三陸町の自然や地域の資源を活かしていく方針である。両市町で震災の教訓を伝えるための教育旅行を誘致することは教育的にも経済的にも価値があり、今後も教育旅行を促進していけると考えられる。しかし、両市町とも震災遺構の取り壊しを巡る意見のへだたりなど、被災者心情が課題となっている。

11. エコツーリズム、グリーン・ツーリズム、 観光まちづくりの目的の比較分析

山本清龍（岩手大学農学部）

・森重昌之・清水苗穂子（阪南大学国際観光学部）
・海津ゆりえ（文教大学国際学部）

名所見物型から体験学習型への旅行形態の変化に伴い、着地型観光や DMO の整備が求められるなど地域の主導性が問われており、その主導性発揮にむけては地域の目標像の共有が重要である。そこで本研究では、エコツーリズム、グリーン・ツーリズム、観光まちづくりを取り上げて、協議会等の地域組織が掲げる目的や理念について比較分析を行うことを目的とした。結果から、3つの観光の目的の構造を図化し、記述の多寡から、グリーン・ツーリズムではガイドやインタープリターの記述が少なくガイドンスの強化を図りづらい可能性があること、環境保全に関する記述が少ないこと等を指摘し、それぞれのツーリズムの特徴と課題を整理した。

12. 短期宿泊型野外体験による効果の向上と持続性に関する研究

遠藤秀平・山本清龍（岩手大学農学部）

環境意識の形成に影響を及ぼす少年期の野外体験の一つである短期宿泊型野外体験の効果については、効果の最

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohoku 大化、持続の観点を含めて定量的に把握した研究の蓄積に限りがある。そこで本研究では、短期宿泊型野外体験が小学校児童の環境と社会の両者の意識の形成に及ぼす効果を明らかにすること、その効果の向上の持続と可能性を考察することを目的とした。一斉配布式アンケート意識調査の結果、既往研究との比較考察から、自然への感性、日常生活習慣に関する意識の向上と持続にむけて、環境学習の機会、活動選択の自由度の確保、野外炊事などの活動の繰り返し、個々の活動の目的の一貫性の保持が重要と考えられた。

初めて歩いた酒田市

東北支部長 丸岡 泰（石巻専修大学）

山形県酒田市の東北公益文科大学で開催された「東北支部大会 2016」は東北支部発足後、2度目の研究大会でした。これは重要な会員の発表機会であり、今後も恒例にしたいと考えています。

私は初めて酒田市を訪れました。大会の前後に2泊したため、酒田の主な観光地を歩いて廻ることができました。当然ですが、観光研究には実体験が必要です。

酒田はドラマ「おしん」の主人公幼少期の舞台として知っていました。そこで、駅前の飲食店で尋ね、名所の山居倉庫へ向かい、市内を歩いていきました。この倉庫はコメの集荷場の一部を観光用の展示室・物産館に転用したもので、舟運用の水路のそばにあります。倉庫は今も使われており、コメ流通の中継地として繁栄した酒田の昔と今をうかがわせるところです。

思いがけない発見がありました。山居倉庫に隣接する庄内米歴史資料館で、「おしん」のポスターを見つけるとともに、そこでの展示品と解説から酒田は「コシヒカリ」「ササニシキ」等の祖先「亀ノ尾」の産地と知ったことです。農業の発展、品種改良に関する文献で知っていた良種「亀ノ尾」のふるさととして酒田を再認識しました。自分が持っていた知識と訪問して得た発見との相互作用が、観光の醍醐味だと改めて感じました。

本号が概要をご紹介している通り、東北支部大会では若手中心に多くの研究者が成果を発表しましたが、これらの研究が育ち、今後の研究につながる「亀ノ尾」のような良種となることを期待しています。

末筆となりますが、この場を借りて、山口泰史会員をはじめ、会場、懇親会等の用意にご尽力くださった東北公益文科大学関係者の皆様に感謝申し上げます。